C'n
SCENE
NEWS
CHIBA CITY MUSEUM OF ART
vol.66

Topics

仏像半島 房総の美しき仏たち

薬師如来立像（部分） 平安時代後期 東明寺（富津市）

館長のつれづれだより ～日本人はインスタレーションの天才～

昨年秋に開催された「須田悦弘展」は、優れた作品と展示の素晴らしさ、斬新さによって、高い評価をいただき、多くの観覧者をお迎えすることができました。この場をお借りしてまずお礼を申し上げます。

須田悦弘さんは、朴(ほう)の木を材に用い、身近にある花や雑草などを繊細かつ写実的に彫り出し、彩色を加え木彫として仕上げています。しかし、ただ単にそれを一つの完成した彫刻とするだけに終わるのではなく、作った作品を作家自身が選ぶどこか特定の場所に置くことで独自の創造的な造形表現を行っているのです。今回の展覧会でも須田さんは、会場に置かれた椅子の下に自ら彫った雑草を潜ませたり、椿を描いた江戸時代の屏風に自作の白と赤の椿の花を組み合わせて見せたりしています。こうした、作品を取り囲む空間も含めて作品とするような手法を「インスタレーション」と呼びます。現代アートの新しい手法です。

「須田悦弘展」より《椿》

作品を単体として見せるのではなく、それが置かれた空間をも含めて一つの造形表現とする。いわば美術品を展示する空間の自作ですが、そのようなことを日本人は、実は古く平安時代のころから行っています。物語の初めとされる『竹取物語』には、かぐや姫に求婚する公達の一人が、姫を妻に迎えるために豪奢な邸宅を建て「内々のしつらひには、いふべくもあらぬ綾織物に絵をかきて」、それを建物の柱と柱の間ごとに張り巡らしたとあります。室内に御帳、屏風、厨子、棚、机、唐櫃、筥、文房具などのいわゆる家具調度を整え、美的かつ創造的に演出し、置き合わせることを「しつらひ(設へ)」といいます。例えば、藤原道長を主人公とする『栄華物語』には、「しざま(しつらへ)」を「珍らかに」したとあり、また清少納言の『枕草子』にも「ことにしつらひたれば、例ざまならぬもをかし」とあるように、その取り合わせには、ありきたりではない良さや趣といった、美的な独創性が求められたのです。

室町時代になると、それに一定の方式が与えられ、「室礼(しつらえ)」と呼ばれるようになります。接客空間としての「会所(かいしょ)」や主人の書斎である「書院(しょいん)」では、壁面に書画が掛けられ、その前に机や棚や押板と称する厚板が置かれ、そこには、花瓶、香炉、燭代、釜、茶入、茶碗、香道具、文房具などの品々が飾られました。「室礼」における作品の選び方、配し方は、専門の同朋衆と呼ばれる、いまでいう美術家あるいは学芸員のような人が行いました。こうした室礼は、やがて書院造りの座敷の飾りや茶室における喫茶の飾りつけへと広くまた変化していきます。

かつてはどこの家にも床の間という空間があることが珍しくありませんでした。そして床の間には掛け軸が飾られ、その前に香炉などを置き、花瓶に花が活けられました。現在ではそうした美術鑑賞の場としての機能をもつ特別な空間はなくなったとしても、自宅の玄関の靴箱(シューズボックス)や居間にあるリビングボードの上に花が活けられ、その背後の壁には写真や絵(たとえそれが複製でも)の入った額を掛けているというのは珍しくない光景でしょう。一方、食器を例にとれば、西洋の食器はスープ、野菜、魚、肉、デザートと、それらが盛られるお皿の大きさに変化はあるものの、同じ色同じ文様とほとんど変わるところがありません。ところが、日本の食器は色、柄、形、材質と、まことに多彩で変化に富んでおり、さらに盛られる食べ物の違いを配慮する器の取り合わせ、付け合せがあって、それが自ずと美的であるといえるのではないでしょうか。

「ものともの」の組み合わせ、取り合わせ、いわばアンサンブルの妙に美を見出すこと。それは日本において、造形表現の上にも、またその鑑賞においても意識され重視されてきました。現代美術の新しい手法であるインスタレーションも、その意味では日本人にとっては、決して新しいものではありません。古くからそれは意識的あるいは無意識のうちの人々のうちに長く行われてきたのです。その意味で日本人はインスタレーションの天才なのです。ですから、みなさんには、いま改めてみなさんの日常の中にすでに美的な生活があることを再発見し、さらにそれを日々のこととして楽しみ、進め、豊かにしていただきたいと思うのです。美術の鑑賞とは、特別なことではないのです。そうした思いを持って、美術館にお出掛けください。あなたご自身の新しい美術の見方、美術館の楽しみ方をきっと見つけ出すことができると思います。

池坊花伝書より

4月16日からは、いよいよ「仏像半島－房総の美しき仏たち」が開催の運びとなります。房総の地には、日本に仏教が伝えられてほぼ1世紀後の7世紀後半には早くもその文化が及んでいます。印旛郡・龍角寺の薬師如来像はそうした早い時代の貴重な例です。以降、この豊かな大地と海を背景に多くの寺院が建立され、多彩な仏像が像造されました。平安時代前期の森厳な気分を漂わす仏像、温雅優美な趣を呈する平安時代後期の定朝様式を受け継ぐ像、それに次ぐ鎌倉時代の運慶様式の受容という流れを追うとともに、千葉に特色をのこす「七仏薬師と妙見菩薩」、「千葉が生んだ法華の傑僧たち」といったテーマも設けています。法華信仰のコーナーでは、いま話題の長谷川等伯の若き日の作とされる、信春の代表作である「三十番神像」「日蓮上人像」ほかも展示の予定です。

薬師如来立像　平安時代後期／十二神将像　鎌倉時代前期　ともに東明寺（富津市）

長谷川信春（等伯）《釈迦多宝如来像》永禄7（1564）年　大法寺（高岡市）

この展覧会では、仏教の伝播と展開に焦点をあて、ヴィジュアルでその姿やあり方をお見せできればと思っています。とりわけ仏像の持つ意味、また仏教美術史の立場から造形的な特徴や美しさを明らかにし、鑑賞者の理解を促すような展示となるよう心掛けました。いま、仏像への関心は想像を超えるものであり、恐らく多様な受け止め方、言い換えると見方や楽しみ方があるかと思います。仏像をお寺のお堂の中でなく、美術館でご覧になって頂くことの限界と、逆に言えば日ごろ拝むことの容易でない仏様たちを、美術館ならではの空間と展示の仕方で味わう機会として、多いに活用していただきたいと思っています。多くの皆さんのお出掛けをお待ちしています。

［館長　河合正朝］

房総の美しき仏たち

半島仏像

（図1）薬師如来坐像　飛鳥時代後期　龍角寺（栄町）

（図2）薬師如来立像　平安時代後期
小松寺（南房総市）　※4月16日～5月19日展示

2013年春。千葉市美術館の新年度は、仏像の展覧会で幕を開けます。主に千葉県内からあまたの仏様におでましいただくもので、題して「仏像半島ー房総の美しき仏たち」。仏像といえば奈良・京都、あるいは鎌倉の寺々をイメージされる方が多いことと思いますが、実は房総半島にも魅力的な仏様が数多くいらっしゃいます。「仏像半島」というメインタイトルには、豊かな海と大地とを背景に陸続と仏像が造形され、永々と守られてきた半島、との意味を込めました。

千葉市美術館では、1995年秋の開館から5年目を迎えた1999年11月に特別展「房総の神と仏」を開催しています。県内各地から仏教・神道美術の優品を集めて房総の宗教美術を展望しようとするものでしたが、今思えば宣伝活動も足りず、広く知られぬままあっという間に終わってしまった感があります。その後展示をご覧くださった方、見逃した方の双方から、伝説の（？）展覧会のように語られてきました。あれから13年あまり。今回は仏教美術、なかでも仏像にテーマをしぼり、「房総の神と仏」ではご覧いただけなかった仏様を中心に、前回をしのぐスケールで改めて房総地方の仏教文化を総覧いたします。以下ごく簡単に、見所をご紹介しましょう。

展示は飛鳥時代後期から南北朝時代に至る造形の変遷をたどる各章と、いくつかのテーマ展示から構成されます。展示室でまず皆様をお迎えするのは、龍角寺（栄町）の銅造薬師如来坐像（図1）。深大寺（東京都調布市）の銅造釈迦如来倚像とともに、「関東の白鳳仏」として名高い仏像です。造立されたのは7世紀末～8世紀初め。残念ながら当初の姿をとどめるのは頭部のみですが、等身大クラスの仏像としては県内のみならず関東でも最古の遺例です。かの興福寺仏頭にも通う、時代特有の大らかな造形が印象的ですが、その笑みにはより人間らしい表情が感じられます。実はこの像が龍角寺を離れるのは今回が初めてのこと。展示室で拝観できる、またとない貴重な機会です。

続いてご紹介したいのは小松寺（南房総市）の秘仏本尊、薬師如来立像（図2）。造立が9世紀に遡るとされる、木彫仏としては県内最古の像です。ただ古いだけではなく、本像は顔の表情や衣文の彫り、猫背ぎみの姿勢などのすべてが極めて個性的で恐ろしいほどのパワーに満ち、観るものを圧倒します。とりわけ特異なのが真横から見た姿なのですが…詳述は避けましょう。今回は前から、横から、ぐるりとご覧いただける予定ですから、その不思議な造形を展示室でとくとご確認ください。ただし展示期間は4月16日（火）から5月19日（日）まで。どうぞお見逃しなく。

房総半島で木彫仏の造像が盛んになるのは10世紀後半以降のこと。とりわけ平安時代後期の作例が各地に数多く遺ります。そしてそれらは大まかに、ふたつの作風に分けることができます。ひとつは重厚で量感豊か、木の材質感をそのまま伝えて時に荒々しささえ感じさせる地方色豊かな一群。いまひとつは優美で端正、中央の造形をよく学んだ、「都ぶり」と評される一群です。「地方色」は古く、「都ぶり」は新しいという単純な構図にはならず、両者が同時期に併存するのが房総の特徴といわれますが、前者は南総に、後者は北総に多く遺る印象があります。

その前者を代表する作例として取りあげたいのが東明寺（富津市）の薬師如来立像（図3）。チラシやポスターのメインイメージとして、今回頻繁にご登場いただいている仏様です。「丸々」という形容は失礼かもしれませんが、顔も肩も実に丸くてボリューム豊か。体軀はあくまでも野太く、一木造の魅力を余すところなく伝えてくれます。像高216cmという堂々たる大きさも特筆すべき点でしょう。展示室では脊属の十二神将立像（鎌倉時代前期）とともにご覧いただきますが（P.3参照）、展覧会への出品は初となるこの十二神将も、瑞々しく緊張感と動感に満ちた優作ぞろい。なかなかのイケメンもいらっしゃいますので、どうぞご期待ください。

（図3）薬師如来立像　平安時代後期
東明寺（富津市）

（図4）薬師如来坐像　平安時代後期　常灯寺（銚子市）

（図5）阿弥陀如来坐像　鎌倉時代　道場寺（富津市）

一方後者の典型例といえるのが、常灯寺（銚子市）の薬師如来坐像（図4）。房総のいわゆる「定朝様」（11世紀に仏師定朝が確立した優美な造像様式）を語るに欠かせない美仏です。整った顔立ちやバランスのよい体躯、滑らかな衣文には、典雅・繊細といった形容がよく似合います。仁治4年（1243）の修理銘が残るのも大変貴重なところ。今回は、飛天の舞うきらびやかな船形光背と豪華な裳懸座とともにおでましになる予定ですから（総高は展示室の天井に届くほどになるはず！）、展示室にさぞかし壮麗な異空間を現出させてくれることでしょう。

続く鎌倉時代。鎌倉時代といえば運慶・快慶でおなじみの慶派様式をまずイメージされることと思います。新都となった鎌倉のある三浦半島と房総半島とは海を隔ててわずかな距離。海路が今よりはるかに重要であった当時にあって、慶派の影響やいかに…と想像がふくらみますが、その受容の様相は必ずしも明らかではないようです。それでも、鎌倉期以降の仏像を集めた７階展示室に足を踏み入れるならば、時代の変化にたちまち気づいていただけるはず。たとえば道場寺（富津市）の阿弥陀如来（図5）が見せる凛と張りつめた表情、あるいは薬師寺（成田市）の金剛力士立像（図6）のリアルで迫力満点の筋骨表現は、造像の世界に確かに新風が吹いたことを教えてくれます。

「房総の神と仏」に引き続きご登場願いました勝覚寺（山武市）の四天王立像（図7）。その2メートルを超す猛々しい姿が放つ存在感と完成度の高さはやはり圧巻です。実は本像には、かの運慶が国の安定を願って龍神に捧げるべく海中に投じ、それが九十九里浜に流れ着いたといういわれがあります。ほかにもごく最近承久元年（1219）の墨書銘が発見された福秀寺（横芝光町）の薬師如来立像や、やはり近年在地仏師賢光の作と判明した西福寺（印西市）の不動明王・毘沙門天立像といった話題作、稀少な彫像による釈迦涅槃像（下出羽区、匝瑳市）や鎌倉を中心に流行した宗風彫刻の受容を示す法華寺（いすみ市）の宝冠阿弥陀如来坐像など、多彩な諸仏

（図6）金剛力士立像　鎌倉時代　薬師寺（成田市）

（図7）四天王像立像のうち増長天　鎌倉時代後期　勝覚寺（山武市）

（図8）七仏薬師如来坐像　平安時代中期　東光院（千葉市）

から南北朝時代までの流れをたどります。

以上のような展示の本流とともに、いくつかのテーマ展示をご覧いただきます。「七仏薬師と妙見菩薩」の章では、北極星あるいは北斗七星の化身であり、千葉氏が守護神としたことから多くの作例が遺る妙見菩薩、そして妙見神と習合したとされる七仏薬師の諸例を集め、房総独自の信仰の形を探ります。千葉氏の妙見信仰の源を物語る作として知られる東光院（千葉市）の七仏薬師如来坐像（図8）は、今年が33年に一度のご開帳の年。今回は特別に、当館展示室でのご開帳となりました。

房総の地は鎌倉時代以降鋳造仏の優品に恵まれており、河内鋳物師から分派した人々を中心とする工人集団、いわゆる「上総鋳物師」の存在が想定されています。「鋳造仏と上総鋳物師」の章では善光寺式阿弥陀三尊像など鋳造仏の秀作を集め、その多彩な像容と技術の高さをご覧いただきます。また房総にあってはあまり遺例の多くない仏教絵画にも光をあて、選りすぐりの十数点から「房総の仏教絵画」の一章を構成いたします。

よく知られるとおり、日蓮宗の祖である日蓮は安房国（現在の鴨川市小湊）の出身。以来この地は日蓮宗の傑僧を数多く輩出しています。「法華の傑僧たち」の章では日蓮をはじめ日朗や日像、日親らにゆかりの彫刻や絵画を多数展観、その面影や生涯をたどります。名僧たちがいずれも故郷を離れて活躍したことから、その多くは県外からの、時を超えたお里帰りとなります。

そして最後にご紹介したいのが、安房国長狭郡（現在の鴨川市打墨）に生まれた江戸時代の彫物大工、初代伊八こと武志伊八郎信由（1751-1824）の作品。房総の仏像が一堂に会するこの機会に、石堂寺（南房総市）多宝塔の脇間彫刻16面（図9）と、大山寺（鴨川市）の倶利伽藍龍（展示期間は4月16日～5月12日）が特別出品されます。「波の伊八」と謳われたのもむべなるかな、と思わせる波はもちろん、龍に犀、獅子や兎が展示室で乱舞し、躍動します。間近に観られる貴重なこの機会に、ぜひその迫力満点の造形にふれていただきたいと思います。

ここまでご案内してきたのは、実は展示のごく一部。出品リストは101を数え、仏像だけでも150体を超える大規模な展観が、お寺を中心とする数多くの所蔵者のご協力により実現しようとしています。展覧会を準備するなかで実感したのは、仏像が今日まで伝えられてきたのは守り続けてきた人がいるからだという当たり前の、しかし忘れられがちな事実でした。なかにはすでにお寺は存在せず、地域の方々が共同で管理されているケースも少なからずあり、印象的でした。そういった方々のお話を聞くと、仏像が地域の守護神として、季節の祭礼や行事と結びついて参拝されてきた例がままあり、宗派を超えた、実に日本的な信仰の形を見る思いでした。仏像を地元の誇りとしてとらえ、ぜひ展示してほしいと言ってくださるのは嬉しい限りでしたが、されどいずこも抱える悩みは同じ。支える方たちの高齢化と今後の管理をどうすべきか—。美術館の職員として大いに考えさせられたことでした。

生まれた場所を離れて暮らすことが普通になってしまった昨今ですが、法事という視点からだけでなく、文化の集積基地として地域のお寺を見直してみると、仏像もまた違った見え方をしてくるかもしれません。もちろん美術館の展示ですから、仏像の造形的な魅力を存分にご堪能いただきたいところですが、本展が足元の文化の蓄積に目を向けるひとつの機会にもなれば、と願っています。

［学芸員　西山純子］

（図9）武志伊八郎信由　脇間彫刻　江戸時代　石堂寺（南房総市）

関連イベント

■記念講演会「房総の仏像ー鎌倉時代を中心に—」
講師：武笠朗（実践女子大学教授）
6月9日（日）14：00より（13：30開場）／11階講堂にて／定員150名／聴講無料
※事前申込が必要です。詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください
※申込締切　5月29日（水）必着

■シンポジウム
4月20日（土）「仏像に見る房総の造形」
4月27日（土）「お寺コンテンツ～寺カルチャーから寺院縁起まで～」
5月4日（土）「房総が生んだ法華の傑僧たち—日朗、日像、日英、日親ー」
いずれも14：00より（13：30開場）／11階講堂にて／先着150名／聴講無料

■声明公演
4月21日（日）15：00より　天台宗南総教区研修所「天台声明ー四箇法要ー」
4月28日（日）14：00より　豊山太鼓「千響」
5月3日（金・祝）、5月26日（日）14：00より　真言法響会「悠久の調べ」
6月8日（土）14：00より、17：00より　天台宗北総仏教青年会＋邵容（中国琵琶）＋張勇（二胡）「佛の聲を聞くー天台の声明」
いずれも30分前に開場／1階さや堂ホールにて／先着150名／観覧無料

■「Bharatanatyam／南インド古典舞踊～ロータスの夢」
出演：小田切淳子（南インド古典舞踊家）
5月19日（日）14：00より（13：30開場）／1階さや堂ホールにて／先着150名／観覧無料

■市民美術講座「門前の館長、仏像を語る」
講師：河合正朝（当館館長）
5月25日（土）14：00より／11階講堂にて／先着150名／聴講無料

■「妙光寺“おひげのお祖師さま”衣替えセレモニー」
6月1日（土）11：00～12：00／1階さや堂ホールにて／先着150名／観覧無料

■美術館ボランティアスタッフによる多色摺ワークショップ「散華をつくろう」
5月26日（日）10：30～12：00、13：00～15：30／1階エントランスにて／参加無料

■立寄りワークショップ「仏像の衣はどうなっている？」
6月1日（土）10：30～12：00、14：00～17：00／7階ミュージアムショップ前にて／参加無料

■親子ワークショップ「すすめ、仏像半島たんけん隊！」
6月1日（土）14：00より／参加無料
対象：小学生の子どもとその保護者（2人1組）12組
※事前申込が必要です。詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください
※申込締切　5月22日（水）必着

■ギャラリートーク
担当学芸員による　4月17日(水) 14：00より
ボランティアスタッフによる　会期中毎週水曜日 14：00より
＊水曜日以外の平日の14：00にも開催することがあります。

仏像半島 —房総の美しき仏たち—

2013年4月16日(火)▷6月16日(日)
［休館日］　5月7日（火）、5月20日（月）、6月3日（月）
［観覧料］　一般 1000（800）円、大学生 700（560）円
※小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料
※（　）内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの65歳以上の方の料金
※前売券はローソンチケット（Lコード：36528）、セブンイレブン（セブンコード：022-139）、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口（6月16日まで）にて販売

◆美術館ボランティアスタッフ４期メンバー募集◆

美術館の楽しみ方を積極的に見つけ、それを他の人と分かち合うために自主的に動ける仲間を歓迎します。あなたも始めてみませんか？
詳しくは、館内またはホームページで配布中の応募要項をご覧ください。

活動内容

応募時に下記の①もしくは②を選んでいただき、いずれかの活動を中心に取り組んでいただきます。
① 鑑賞教育のサポート（鑑賞リーダー）　10名程度
② ギャラリートーク　10名程度

応募条件

① 美術館を日常的に利用している方
② 人と接することが好きな方
③ 千葉市内在住・在勤・在学のいずれかで、平成25年4月1日現在18歳以上の方（高校生は不可）
④ 下記日程の研修Aに全日程参加できる方。研修Bに可能な限り参加できる方（欠席の場合は課題の提出があります）。
⑤ 登録期間（2年間／以降2年毎に更新可）を通して、ボランティア活動の実践が可能な方
⑥ 原則として月1回の定例会（現在は土曜日午後に開催）に出席できる方
⑦ ⑥の他、年間2つ以上の展覧会会期中に、原則として2回以上活動できる方
⑧ メーリングリストでの連絡が可能な方（PC、携帯は問いません）

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

2013年度上半期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

○第1回	5月25日(土)	「門前の館長、仏像を語る」 ［講 師］河合正朝(当館館長)
○第2回	7月20日(土)	「彫刻家・高村光太郎　その歩み」 ［講 師］藁科英也(当館学芸係長)
○第3回	8月10日(土)	「彫刻家・高村光太郎　その時代」 ［講 師］藁科英也(当館学芸係長)
○第4回	9月7日(土)	「日本絵画の花鳥風月」 ［講 師］伊藤紫織(当館学芸員)
○第5回	10月19日(土)	「祈りと美術」 ［講 師］水沼啓和(当館学芸員)

※都合により開催日、講座名、内容の一部が変更となる場合がありますので、ご了承ください。
変更の際は各展覧会のチラシ、ホームページ等にてお知らせいたします。

［時 間］14：00より(開場は30分前)［場 所］11階講堂［定 員］先着150名(入場無料)

◎ 千葉市美術館「友の会」会員募集中

展覧会が何度でも観覧でき、展覧会図録も一割引で購入できる「友の会」入会が大変お得です。

［会員の特典］

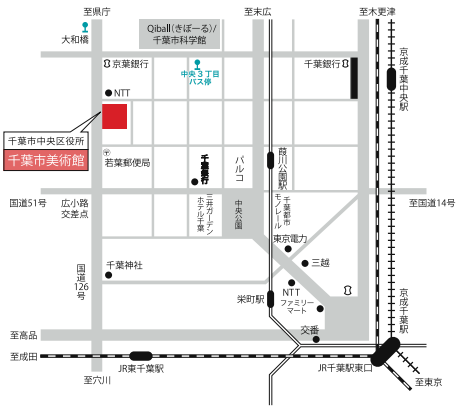
○ 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
○ 会員の同伴者(3名様まで)は、団体料金で観覧できます。
○ ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズを10%引で購入できます。(一部除外あり)
○ 展覧会や講演会等の美術館情報をお送りします。
○ 会員対象の催しもあります。

	一般会員	学生会員 (大学・専門)	ファミリー会員 (ご家族4名様まで)
入会金	1,000円	500円	2,000円
年会費	2,000円	1,000円	4,000円

入会のお申し込みは美術館受付にて。

◎ 編集後記

2013 年度最初の美術館ニュースは、最注目の「仏像半島」展特集でお送りしました。展覧会の内容も盛りだくさんとなっていますが、関連イベントも多数ご用意しておりますので、鑑賞とともにぜひご参加ください。展覧会にあたっての仏像の搬出、搬入や展示作業についてはホームページでご報告したいと思っております。次号は 6 月 29 日より開催の「生誕 130 年記念　彫刻家・高村光太郎展」と夏の所蔵作品展「琳派・若冲と花鳥風月」を特集する予定です。2013 年度もどうぞよろしくお願いいたします。　(磯野 愛)



［開館時間］
10：00 -18：00（毎週金・土曜日は20：00まで）
＊入場受付は閉館の30分前まで

［交通案内］
◎JR千葉駅東口より
○徒歩約15分
○バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩3分
○千葉都市モノレール県庁前方面行「葭川(よしかわ)公園駅」下車徒歩5分
◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
◎地下に駐車場があります

［編集・発行］
千葉市美術館
〒 260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311　FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
http://www.ccma-net.jp/
［発行日］2013 年 4 月 9 日
［印　刷］株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art